

# ロマンス諸語および他のヨーロッパ諸語における未来の表現

Ensayo de una clasificación tipológica de las lenguas europeas según la expresión del futuro

下 宮 忠 雄  
Tadao SHIMOMIYA

本稿は1984年11月24日、京都外国語大学において行われた日本ロマンス語学会第21回大会の統一テーマ「ロマンス語における未来表現」における発表を敷衍したものである。最初にヨーロッパ諸語における未来の表現の類型をとりあげ、次にヨーロッパの地域別にこれらのタイプの現われ方を見る（地域類型論的考察）。会場において、いくつかの有益なコメントを得たことに感謝したい。

1. 古代印欧語における未来の形態素 *-s*。古い印欧語においては *-s* による未来が支配していた。サンスクリット語 *dā-syā-mi*、リトアニア語 *dúo-siu*、ギリシア語 *dō-sō* は、いずれも“*dabō*”の意味で、語根と人称語尾の間に *-s* をもち、古代ラテン語 *faxō*, *capsō* (= *fēcerō*, *cēperō*) にも *-s* が見える。この *-s* はサンスクリット語 *pi-pá-sa-ti* (彼は飲みたい、語根 *pā-* の重複形) に見える願望法 (*desiderativum*) と同じ起源である (W. Porzig, W. P. Schmid, F. R. Adrados)。これに対して、古典ラテン語期に *cantā-bo* という改新形が作られた。この *-bō-* は印欧語根 *\*bhew-* 「居る、ある」(サンスクリット語 *bháva-ti*、ギリシア語 *phúō*、ラテン語 *fuī*、英語 *be*、ロシア語 *by-t'*) の母音ゼロ度形 *\*bhw-ō* から来たもので、*cantābō* は“*erō cantā(ns)*” 「私は歌う者となるであろう」ほどの意味である。類似の表現はサンスクリット語 *dātā-smi* (*dātā + ásmi*) にも見られる。これは字義通りには“*dator sum*”で、意味は“*dabō*”である。屈折の豊富なサンスクリット語においてもすでに、このような迂言形が見られる。なお、“*be*”動詞を用いる未来表現はロシア語(2.2)やフィンランド語(6.4)にもある。

2. ヨーロッパ諸語では迂言的に表現され、次のようなタイプがある。

2.1 *cantāre habeō* のタイプ：ロマンス諸語、アルバニア語

2.2 助動詞を用いて：I'll give, ich werde geben, ロシア語 *búdu davát'* (原義：“*erō dare*”)

2.3 小詞(未来小詞)を前置して：現代ギリシア語 *thà dósō* “*dabō*”, アルメニア語(東アルメニア語) *kə tam* または融合して *ktam* “*dabō*” この *kə* は、G. R. Solta (1963: 120) によると、*\*kay ew berē* “*er ist da und bringt*” > *\*k(ay) u berē* > *ku berē* > *kə berē* のような過程を経て生じた。西アルメニア語の *piti grem* “*scribam*”, *piti gres*”, *scribēs*”, *piti grē* “*scribet*” における *piti* は“*es ist nötig, man muss*”の意味である。

2.4 アスペクトの相違を伴うもの：ロシア語、未完了体未来 *búdu davát'* (私はしばしば与えるだろう)、完了体未来 *dam* (私は与えるだろう、与えよう、きっと、一度だけ)；現代ギリシア語 *thà dínō* (私はしばしば与えるだろう)、*thà dósō* (私は一度与えるだろう)。スラヴ諸語の文法では前者を *imperfective future* 後者を *perfective future* と呼んでいる。現代ギリシア語では前者は継続未来 (*futurum continuum*)。または現在未来 (*präsentisches Futur*) と呼ばれ、現在の接続法から作られる。後者は絶対未来 (*futurum absolutum*) またはアオリスト未来 (*aoristisches Futur*) と呼

ばれ、アオリスト語幹から作られる。スラヴ諸語の場合と同様、前者は繰り返される行為、規則的な行為を表わし、後者は一度の行為を表わすのに用いられる。例： *thà sou̯ gráphō sukhná* [ *θà sù gráfo sixná* ] (私は君にしばしば書くだらう)、 *thà grápsō apópse stō phílo mou* [ *θà grápsō apópse stō filo mu* ] (私は今晚、私の友人に書くだらう)。上例は J. Kalitsunakis (1963)より。

2.5 一言語中に二つの規範 (norma) が同居している場合。アルバニアのゲグ方言 *kam me shkruē* “*habeō ad scribere*”, アルバニアのトスク方言 (1972年以降トスク方言が標準語となる Armin Hetzer は *vereinheitlichte Standardsprache* 統一化された標準語と呼んでいる) *do të shkruaj* “*volō ut scribam*”. 後者は不定法を失ったバルカン諸語に特有の語法で、“*ut* + 接続法”でもって未来の内容を表わし、現代ギリシア語の *thà gráphō*, ルーマニア口語 *am sa cînt* “*habeō ut cantem*”と同じ表現法を用いる。

3. ロマンズ語未来の種々のタイプ。H. Lausberg Bd. 3 p. 213 ff. による。ロマンス語に関する限り筆者はこの Lausberg の小冊子に長年多くを負っている。“*multum in parvō*” といふか “*totum in compendiō*” といふか、実にすばらしい本である。

### 3.1 *volō cantāre* > ルーマニア語 *voi cîntá*

これは英語 *I will sing*, 現代のペルシア語 *xvāham sorūd* (= *volō cantāre*) “*cantābō*” と同じ構成である。ペルシア語の現在人称変化は *xvāham sorūd*, *vxāhī sorūd*, *xvāhad sorūd*, *vxāhīm sorūd*, *xvāhīd sorūd*, *xvāhand sorūd* となり *xvāham* 以下の人称語尾に印欧語の面影がはっきり読みとれる。

3.2 *veniō ad cantāre* > レトマン語 オブヴァルド方言 (*obwaldisch*) *jeu végnel a cantar*. これはスウェーデン語の単純未来 *jag kommer att sjunga* と同じであり、「行く」「来る」の動詞が未来の表現に用いられることはフランス語 *je vais chanter*, スペイン語 *voy a cantar*, 英語 *I'm going to sing* などにも見られる。(ギリシア語の *futurum atticum* と言われる *dōséō* < 印欧語 \**dōsjō* 「私は与えられるだらう」の中に *jā* 「行く」が含まれると H. Hirt 3: 127 は言っているが疑問)

3.3 *habeō de cantāre* > ポルトガル語 *hei-de cantar*. この代りに *cantāre habeō* > *cantarei* も同様に用いる。この *cantarei* は、目的格の人称代名詞を伴うとき *cantá-lo-ei* (*cantár-o-ei*) のように不定法と未来語尾の間に *-o-* が挿入され、改新的形態法の密着度がまだ未熟な段階を示している (Ernst Lewy の用語 *Endunglockerheit* 「語尾のゆるみ」にあたる)。

3.4 *cantāre habeō* これは典型的なロマンス語の形式で、イタリア語、エンガディネ (レト・ロマン) 語、フランス語、プロヴァンス語、カタラン語、スペイン語、ポルトガル語に用いられ、ルーマニア語では *am să cînt* “*habeō (ut) cantem*” の形で用いられる。

4. バルカン地域における未来の表現形式。ここに4つのタイプが見られる (G. R. Solta 1980: 215 ff.): 1. *volō cantāre*; 2. *volō cantem*; 3. *vult cantem* (この *vult* は非人称で、のちに不変化の小詞となる。これが本来の *balkanism* とされる); 4. *cantāre habeō* ないし *habeō cantem*.

4.1 *volō cantāre* の形式はルーマニア語 *eu voi cîntá*, *tu vei cîntá*, *el va cîntá*, *noi vom cîntá*, *voi veji cîntá*, *ei vor cîntá* に最もよく残っている。ほかに、ブルガリア語の不定未来 (*unbestimmtes Futur*) *vide-šta* “*vidēbō*” (一度見るだらう、たぶん見るだらう)、セルビア語 *ja ću pisati* あるい

は人称代名詞を省略し、不定法の *-ti* を除去して *ću* (< *hoću* 私は望む) を後接し *pisaću* “*scribam*”, クロアチア語も *pisati ću* または *pisaću* “*scribam*” のように言うが、いずれもラテン語 *volō* に相当する語彙素の文法化を示している。

4.2 *volō cantem* のタイプはロマンス語の形式をバルカン語的文法で表現したものといえる。不定法の消失により、*ut*+接続法を代用する。ルーマニア語 *voi să cînt ‘volō cantem’* は主語の意志を表わし (G. R. Solta), ブルガリア語 *šta da piša ‘volō (ut) cantem’* は方言ないし古風な表現とされる。

4.3 *vult cantem* のタイプ。ルーマニア語 *eu o să cînt tu o să cînți, el o să cînte, noi o să cîntăm, voi o să cîntați ei o să cînte* における *o* は *volō* の3人称単数 *vult* に相当する *va* から来ており、今日では非人称的になっている。これと同じ形式がブルガリア語 *az šte piša ‘I’ll write’, ti šte pišeš ‘you’ll write’, toj šte piše ‘he’ll write’, nie šte pišem ‘we’ll write’, vie šte pišete ‘you’ll write’, te šte pišat ‘they’ll write’* にも見える。この *šte* は「彼は望む」の短縮形から来ている。Stephan Mladenov は *šte napíša ‘scribam’* の形式を定未来 (*bestimmtes Futur*) と呼んでいる。アルバニア語 *do të shkruaj ‘scribam’, do të shkruash ‘scribes’* 等における *do* は *dua* “*volōō*” の3人称単数である。 *dua të shkruaj* とすると “*I wish that I write* → “*I wish to write*” の意味となる。*shkoj* “*ich gehe*” の未来人称変化は *do të shkoj, do të shkosh, do të shkojë, do të shkojmë, do të shkon, do të shkojnë* となる。これらは現代ギリシア語も同じで “*I’ll write*” の不定未来 (現在未来) は *thà gráphō* [ *gráfo* ], *thá gráphēis* [ *gráfis* ], *thà gráphēi* [ *gráfi* ], *thà gráphōme* [ *gráphome* ], *thà gráphete* [ *gráfete* ], *thà gráphoun* [ *gráfun* ]。定未来 (アオリスト未来) は *thà grápsō, thà grápsēis, thà grápsēi, thà grápsōme, thà grápsete, thà grápsoun* となるが、この *thà gráphō* は中世ギリシア語 *thē* (< *thélei ‘vult’*) *nà gráphō* から来ている。接続詞 *nà* は古典ギリシア語の *hína* (ラテン語 *ut*) である。

4.4 最もロマンス語的な *cantāre habeō* はバルカン語域においては次の諸形式に受け継がれて存続している。アルバニア語ゲグ方言の未来は *kam me + inf.* で表現され “*I’ll write*” の人称変化は *kam me shkruē, ke me shkruē, ka me shkruē, kemi me shkruē, keni me shkruē, kanë me shkruē* となる。*me* は “*with*” の意味の前置詞である。ルーマニア語の口語に用いられる “*eu am să cînt, tu ai să cînți, el are să cînte, noi avem să cîntăm, voi aveți să cîntați, ei au să cînte* は不定法の代りに *ut*+接続法を用いるバルカン語法にしたがっている。

5. ゲルマン語域では、ロマンス語域におけるほど統一的な未来形がない。英語 *I shall sing, I will sing* は本来「義務」(cf. 上記 2.3 の西アルメニア語) や「意志」を表わした独立の動詞が文法化されたもので、*I’ll sing* のように縮小されると、文法形態素の様相が一層濃厚となる。ロマンス語の場合と異なる点は、未来性が動詞に融合するのではなく、人称代名詞に融合することである。デンマーク語・ノルウェー語も英語と同じように *jeg skal synge, jeg vil synge* が用いられるが、義務・予定・意志・願望などの話法的なニュアンスを依然として内包しており、近い未来の場合には、これらのモーダル(話法的)な意味を含まない単純現在を用いて *jeg synger imorgen* (私は明白歌います。) のように言う。ドイツ語 *ich werde morgen singen* というと、「私は明白歌うつもりだ」という話法的な意味が加わる。単に未来のことを表現するためなら、*ich singe morgen* でよい。特に出発や到着をあらわす動詞の場合にそうである。

ゲルマン語においては単純時制としては現在と過去しかなく、古い時代には迂言法による未来は極めて不完全にしか発達していなかった。ゴート語では接頭辞 *ga-* をもつ動詞の現在形がギリシア語の未来形を翻訳するのに好んで用いられた。ゴート語 *gatimrja* = ギリシア語 *oikodomésō* 「私は建てるだろう」；ゴート語 *gasafhwa* = ギリシア語 *ópsomai* 「私は見るだろう」。9世紀の高地ドイツ語福音書 *Tatian* においても *gigarawit* = *prae-parābit*, *giheilū* = *curābō*, *giheizent* = *vocābunt* のように *gi-* の複合動詞の現在形がラテン語の未来形を訳している。この *ga-* を *Wilhelm Streitberg* は *perfectivierendes ga-* (完了化の *ga-*) を呼んだのであるが、これが今日のドイツ語では文法化されて過去分詞の前綴となっている。未来の助動詞としてはゲルマン語全般に *skal* が古くから用いられる。ゴート語にも少数だが *hwa skuli þata barn waírþan Luk. 1:66* = *tí ára tò paidíon touto éstai* (この子は、いったい、どんな者になるだろう)。Taitan のドイツ語にも *scal sīn* = *erit*, *trinkan skal* = *bitūrus sum* のように見られる。古代ノルド語では *skolo* のほかに *muno* が多く用いられる。*þar muno eptir gullnar tǫflor finnaz* (そこに黄金のゲーム板がふたたび見つかるだろう、巫女の予言 60)、*þar skolo dyggvar dróttir byggja* (そこに忠実な臣下たちが住むだろう、巫女の予言 63)。ドイツ語では *werden* による未来形が徐々に浸透した。ゴート語 *saúrgandans waírþiþ Joh. 16:20* = *lupésesthe* (汝らは悲しむであろう) のように、最初は現在分詞とともに用いられたが、のちに不定形とともに用いられるようになった。

オランダ語は、近代ヨーロッパにはめずらしく、ラテン語の未来分詞に相当するものをもっている。*“ik zal komen = I'll come* を *hij beloofde* (彼は約束した) に埋め込むと *hij beloofde te zullen komen = he promised to come* となる。ラテン語に訳せば *prōmisit ventūrum esse* となろう。不定法つき対格構文 (*acc. cum inf.*) における未来形は古代ノルド語では *hann kvezk vaka mundu* (= *he said he would be awake*) のように *munu* (= *shall, will*) の過去形 *mundu* を用いる。ここの *kvezk* は *kvað sik* 融合して *i* がウムラウトを起こした後に消えたもので、語法的にはラテン語の *dixit sē (vigilātūrum esse)* に相当する。古代ノルド語では、若干の動詞(とくに助動詞)は過去3人称複数を不定法過去 (*infinitive preterite*) に用いる。 *vildu* “*voluisse*”, *skyldu* “*debuisse*”, まれに *fóru* “*ivisse*” のように。

6. その他の言語。以上でロマンス語域、ゲルマン語域、バルカン語域を見てきたので、残る若干の言語について考察する。

6.1 スラヴ諸語。ゲルマン語(ヨーロッパ以外も含めて言語人口4.7億)、ロマンス語(4億)について、スラヴ語(3億)はヨーロッパ第三の大きなグループである(バルカン諸語は0.6億)。スラヴ語域のヨーロッパの裏庭(Hinterhof - Gy. Décsy の用語)と呼ばれ、陽のあたる表庭にくらべて、言語的改新を行うことが少ないのであるが、それにもかかわらず、ウクライナ語にはその胚芽が見られる。ここでは、スラヴ語的な *búdu pisáti* (ロシア語=不完了未来 *búdu pisát'*) と並んで *pisátimu* (私は書くだろう) が生じている。これは *pisáti* (書く) と *imú* (“*habeō*”, 原義 “*capiō*” ラテン語 *emō* と同根) の膠着 (*agglutinatio*) 形で、*scribere habeō* > フランス語 *j'écrirai* とまったく同じ構成である。この形式はロシア語においてさえ未知のものであり、スラヴ語域では、まだまれな現象である。スラヴ語における標準的な未来形式は依然としてロシア語の未完了形 *búdu pisát'* (私は書くだ

ろう)と完了形 *napišú* (私は書くだろう、書いてしまうだろう)に代表されるものである。これをかりにラテン語で表わせば *erō scribere* (未完了)、*conscribō* (完了)のようになろう。*búdu pisát'* (*erō scribere*)にあたる *I am to write* は未来時に関連しているが「私は書くことになっている」のように話法的な意味をもっている。*conscribō* の *con-* は語源的にも機能的にもゴート語の *ga-* にあたる。(cf. *comedere* > スペイン語 *comer*)

6.2 ケルト語。ここには類型論的に “*cantābō*” (アイルランド語)、“*cantem*” (ブルトン語)、“*erō cantāns*” (ウェールズ語)の三つの形式が見られるが、このうち興味深いのはアイルランド語である。その現代語 *scríobhaim* [ʃrɪːm] “I write”, *ólaim* [óːlɪm] “I drink” に対する未来形 *scríobhfad* “I’ll write”, *ólfad* [óːlhəd] “I’ll drink” に見える *f* [h] は古代語 *no charub* [Xáruv] “*amābō*” < \**nu* (*nunc*) *carābō* (この語形は Lindsay 1963: 492 による)における *b*, ラテン語 *amābō*, *cantābō* の *b* と同じで、ラテン語とアイルランド語間の顕著な *isogloss* である。( *carābō* はラテン語 *cārus* の *denominative* より)。古代アイルランド語の未来の変化表は August Schleicher がその「印欧語比較文法綱要」(1861, 1876<sup>4</sup>, 1974: 824)の中で 1. *-car-ub* (語根 *car*, 動詞幹 *cara-* 愛する) = \**cara-bu* vgl. *carē-bō* 2. *cair-fe* = \**cara-fi* vgl. *care-bis* 3. *cair-fe-d* = \**cara-fi-d* vgl. *carē-bit* のように挙げられている。アイルランド語とラテン語のこの *isogloss* を最初に指摘したのは Vl. Georgiev (1981) によると、Berlin の C. Lottner: *Über die stellung der Italer innerhalb des europäischen Sprachstammes*. KZ 7 (1858) 749, 161-193 で、さいわい学習院大学にバックナンバーのリプリントがあったので、該当箇所を見ると *cairim* (*amo*), *carub* (*amābō*), *cairid* (*amat*), *carthar* (*amātur*) のような未来形と *r* 受動態の共通性が述べられている。これらをもとに A. Meillet (1922) は *unité italo-celtique* を提唱したのであるが、これはノルウェーのケルト語学者 C. J. Marstrander (1929) らの批判を受けることになり、その後 C. Watkins (1966), W. Meid (1968), K. H. Schmidt (1969) などの専門家によってもイタリック語・ケルト語統一性は否定された(もちろん *carub* = *amābō*, *carthar* = *amātur* 等の共通性は正しいのであるが)。古代アイルランド語の未来は、上記 *-f-* によるもののほかに、サンスクリット語・ギリシア語・バルト語に共通の *-s-* 形もあり、*-f-* は弱変化動詞に、*-s-* は強変化動詞の語根重複形に接辞される (J. Pokorny 1969: 66). *do-rímiub* “ich werde aufzählen” < \**-rīm-ī-bhwo* cf. *alat. venībō*; *gigis* “er wird bitten” < \**g<sup>Whi</sup>-g<sup>Whedh</sup>-s-ti* (語根重複)。

上に Schleicher が vgl. *carēbō* として掲げているものはファレリア語 (*falisco*) *carefo* “ich werde entbehren”にあたるもので、有名な銘文 *foied vino pipafo, cra carefo* = *hodiē vīnum bibam, crās carēbō* に出てくる。W. P. Schmid (1966: 50) はこれを *faliskisches Futur* と呼んでいる。

6.3 バルト語は、上掲リトアニア語 *dúosiu* “ich werde geben” に見るように非常に古い *s-* 未来を保持している。この *-s-* は生産的でリトアニア語 *dirbti* (働く) の現在形で、*āš dirbu, tū dirbi, jīs dirba* に対し未来形は *āš dirbsiu, tū dirbsi, jīs dirbs* のように人称変化する。ラトヴィア語も同様に *darīt* “to do” の現在 *es daru, tu dari, viņš dara* に対し未来は *es darīšu, tu darīsi, viņš darīs* となる。

6.4 ヨーロッパの中の非印欧語を三つほど簡単に見てみよう。ハンガリー語は *írni fogok* “ich werde schreiben”, *írni fogsz* “du wirst schreiben”, *írni fog* “er wird schreiben” (主体活用) のように表現するが、ここに未来の助動詞として用いられる *fogni* は *fassen, greifen* の意味で、ラテン語で表わす

と *scribere capiō* となり、ウクライナ語 (6.1) *pisátimu* の構成に一步近づく。さらに、多くの印欧語で「持つ」の意味の動詞が「つかむ、にぎる」の意味の動詞に由来していることを考えると、ロマンス語の *scribere habeō* の前段階を暗示しているように思える。英語の *I have to write* (私は書かねばならない) は *I shall write* (原義: 私は書くことになっている) に比して話法的な意味が顕著である。フィンランド語もハンガリー語同様、通常現在形を未来時にも用いるが、迂言的には *olen sanova* “*ich werde sagen*”, *olet sanova* “*du wirst sagen*”, *on sanova* “*er wird sagen*” のように言う。これは “*sum dīcēns*” にあたる。同様に *olen tuleva* “*ich werde kommen*”, *olen kirjoittava* “*ich werde schreiben*” となる。この *-va* は第一分詞と呼ばれ、*saapuva juna* (到着する列車)、*lähtövät junat* (発車する列車、複数) のように附加語的にも用いる。

バスク語は *idatziko dut* “*escribiré*”, *idatziko duk* “*escribirás*” (男性) *idatziko dun* “*escribirás*” (女性) *idatziko du* “*escribirá*” のようにいうが、語幹 *idatzi* (書く) に *-ko* がついた形は第三分詞(未来分詞)と呼ばれ、ラテン語で(強いて)表わせば “*scrīptūrum habeō*” となる。あるいは、この *-ko* は「……するために」の意味に用いられる (*ikuste-ko* 見るために、*jate-ko* 食べるために、*idazte-ko* 書くために) ものと同じと考えれば “*lo tengo para escribir*” の意味になる。バスク語における *-ko* の用法は非常に多岐にわたり、P. Mújica はこれに 15 の用法を与えている。

## 7. 結論。未来時の表現には大別して、

1. implicit
2. explicit

の二つの形式が考えられる。implicit な形式とは現在形 (*canto*) を代用することであり、explicit な形式とは、直説法現在とは異なる何らかの形式を用いることである。これに、

- 2.1 他の単純形、たとえば接続法 (*scrībam*)
- 2.2 接辞: ギリシア語 *dō-sō* “*dabo*”; ラテン語 *cantā-bō*
- 2.3 複合形:

膠着形: フランス語 *je chanter-ai*

分離形: ドイツ語 *ich werde singen*

- 2.4 不変化の小詞を用いる: 現代ギリシア語 *thā dōsō* “*dabō*”

下の図に見るように複合形のうち、特に顕著なのは *volō cantāre*; と *cantāre habeō* である。

言語の発達には次の三つのタイプがあると思われる。

1. 系譜的発達 *desarrollo genético (genealógico)*
2. 接層的(言語連合的)発達 *desarrollo adstrático (sprachbündico)*
3. 平行的・散発的発達 *desarrollo paralelo y esporádico*

これらは未来の表現に関してばかりでなく、音韻・文法・語彙の各方面にも共通していると思われる。未来表現に関していえば、1. はロマンス語域 (*cantāre habeō*) および旧ヨーロッパ (*s*-未来) に見られ、2. はバルカン語域がその典型であり、3. はゲルマン語域および、多かれ少なかれヨーロッパ全域に見られる。J. Haudry (1979: 96) の用語を借りれば独立の語彙素が文法化され (*évolution cyclique*)、改新が絶えず行われる。未来表現に関していえば、一般的な傾向は、

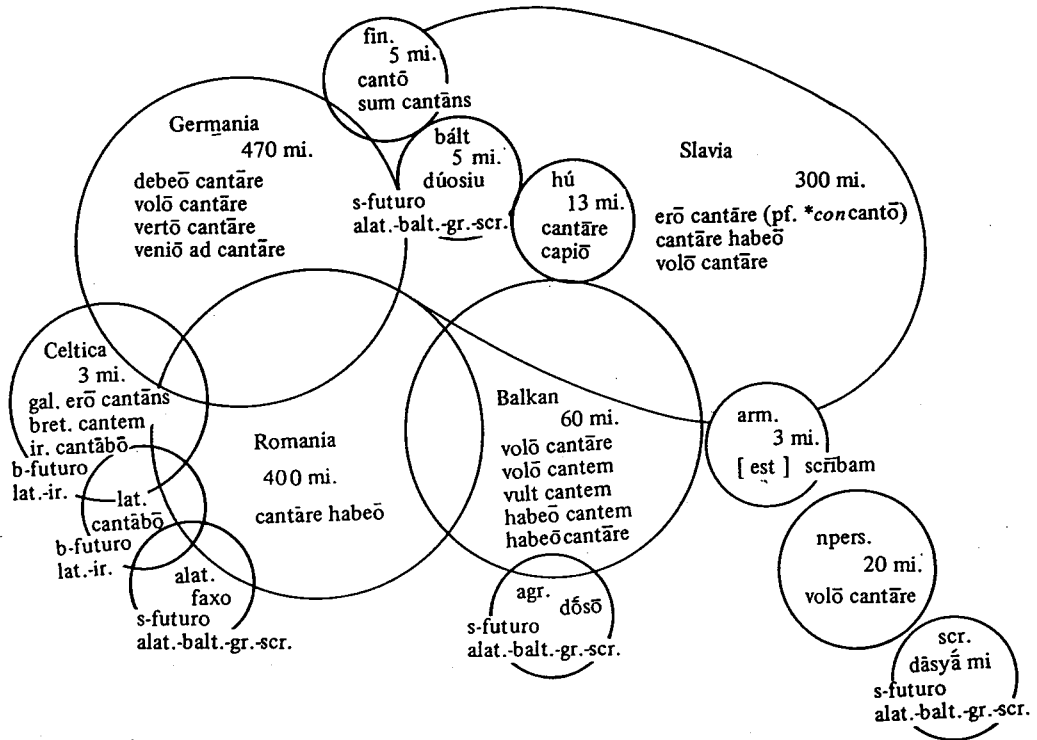
desiderativo → futuro

conjunctivo, potencial → futuro

habēō, volō → futuro

のように文法機能の推移ないし語彙の文法化が行われる。

地域類型論的に見たヨーロッパにおける未来表現形式の種々相（ラテン語形で表わす）。数字は言語人口の概数（mi. = millions）



## 8. Bibliografía:

- Adrados F. R.: Evolución y estructura del verbo indoeuropeo. 2 tomos. 2da ed. Madrid 1974.
- Boronkay A.: Einführung in das Ungarische. 3. Aufl. Halle (Saale) 1959.
- Boyle J. A.: Grammar of Modern Persian. Wiesbaden 1966.
- Camaj M.: Lehrbuch der albanischen Sprache. Wiesbaden 1969.
- Décsy, Gy.: Die linguistische Struktur Europas. Wiesbaden 1973.
- Fennell T. G. and H. Gelsen: A Grammar of Modern Latvian. 3 vols. Mouton 1980.
- Finck, F. N.: Lehrbuch der neuostarmenischen Litteratursprache. Marburg 1902.
- Georgiev Vl.: Introduction to the History of the Indo-European Languages. 3rd ed. Sofia 1981.
- Haudry J.: L'indo-européen. Paris 1979.

- Hetzer A.: Lehrbuch der vereinheitlichten albanischen Schriftsprache. Hamburg 1978.
- Hirt H.: Handbuch des Urgermanischen. Teil 3: Abriss der Syntax. Heidelberg 1934.
- Kalitsunakis J.: Grammatik der neugriechischen Volkssprache. 3. Aufl. Berlin 1963.
- Lausberg H.: Romanische Sprachwissenschaft. Bd. 3: Formenlehre. Berlin 1962.
- Lewis H. and Holger Pedersen: A Concise Comparative Celtic Grammar. 3. Aufl. Göttingen 1974.
- Lindsay M. W.: The Latin Language. Oxford 1894, reprint New York 1963.
- Lord A. B.: Beginning Bulgarian. Mouton 1961.
- Meillet A.: Les dialectes indo-européens. 2e éd. Paris 1922.
- Mladenov St.: Geschichte der bulgarischen Sprache. (Grundriss der slavischen Philologie und Kulturgeschichte, Bd. 6) Berlin-Leipzig 1929.
- Mújica Pl.: Afijos vascos. Bilbao 1969.
- Naono A.: Rumaniago no nyumon. Hakuuisha 1980.
- Pisani V.: Glottologia indeuropea. 4a ed. Torino 1971.
- Pokorny J.: Altirische Grammatik. 2. Aufl. Berlin 1969.
- Porzig W.: Die Gliederung des indogermanischen Sprachgebiets. 2. Aufl. Heidelberg 1974.
- Schmid W. P.: Studien zum baltischen und indogermanischen Verbum. Wiesbaden 1963.
- Schmid W. P.: Geschichte der lateinischen Sprache. Berlin 1966.
- Senn A.: Handbuch der litauischen Sprache. Bd. 1: Grammatik. Heidelberg 1966.
- Solta G. R.: Die armenische Sprache. (in: Armenisch und kaukasische Sprachen. Handbuch der Orientalistik, 1.7.) Leiden 1963.
- Solta G. R.: Einführung in die Balkanlinguistik. Darmstadt 1980.

9. あとがき。統一テーマにおける菅田茂昭氏の発表“*Il futuro nell'italiano e nelle lingue romanze*”における未来の類型論 *futuro enclitico (cantaré): futuro proclitico* (ギリシア語 *thà grápho* は非常に興味深く、また同氏の *costrutto sintetico* → *costrutto analitico* → *costrutto sintetico* → …の図式は J. Haudry の *évolution cyclique* を想起させる。言語の研究においては形式を重視するか意味を重視するかは H. Sweet や O. Jespersen によっても議論された点で、この点、高橋覚二氏の“*Expresiones de futuro en español*”は精密で実証的な研究であると思われる。ドイツ語 *ich singe morgen* と *ich werde morgen singen* を比べるとその差は後者が *modal* な意味を含むことであるが、この点イタリア語について Prof. Aurelio Roncaglia にお伺いしたところ、*Parto domani* と *partirei domani* の差はアスペクトの差であるという。そして *partirei stasera* とは言わない、とのことであった。